

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

国際教育協力を動かすもの

IDCJはJICAや省庁の委託事業だけでなく、一般財団の公益目的の支出計画の予算を用いて国際協力事業を行っている。本年度はその一環として、PLANベトナムが昨年12月に実施した授業研究セミナーに専門的助言・支援を行った。本稿では、PLANベトナムとIDCJが連携するに至った経緯、セミナーの教師の様子から、教育現場が求めている研修プログラムを考えたい。

JICA技術協力プロジェクトが残したもの

IDCJはかつて、JICA委託事業である「ベトナム国現職教員研修改善計画」において、新カリキュラム普及のための「現職教員研修モデル」を開発した。実施期間は2004年から07年までの3年間だった。教員や校長のインタビュー結果等を踏まえた終了時評価においては、「プロジェクトのもとで、『総合的』な研修モデルが成功裏に開発されている」と評価されたものの、教育訓練省がモデルの制度化に積極的でなかったことから、継続には至らずプロジェクトは07年に終了となった。

しかし、プロジェクト終了後も、支援対象地域のバックザン省の行政官および学校現場は、研修モデルのうち特に授業研究に強い関心を寄せていた。その後、行政官たちは授業研究の定着を図るために、自ら志願して校長になり、案件の日本人専門家にボランティアとしての支援を要請し、授業研究を実践した。日本人専門家は行政官らの要請に応え、定期的に訪問指導を行い、行政官らの実践を支え続けた。

行政官たちが授業研究を実践していたところ、PLANベトナムやSave the ChildrenベトナムといったNGOが授業研究に注目し始めた。NGOの教育事業担当者は「授業研究はこれまでの教育研修とは違う」と語り、日本人専門家の学校訪問に自主的に同行した。また、バックザン省の行政官および校長経験者をリソースパーソンとして自らのプロジェクト地域に招聘し、授業研究を普及させていった。

授業研究に教師が求めているもの

昨年12月に開催されたセミナーには、筆者に加え、日本で授業研究ネットワークをつくる「学びの共同体」スーパーバイザーの方が参加した。これまでボランティア支援をしてきたメンバーである。セミナーでは、これまでの訪問指導と同様、教師たちの熱意を知ることができた。「子どもを見取る」ことの面白さ、奥深さをベトナム人教師は真剣に知りたがっていた。公開授業について、とつとつとしながらも、教師と生徒との学びの物語をつむぎ



ベトナム・バックザン省 算数の授業より

だそうとする様子がとても印象的であった。

果たして、これほどまでに教師が、行政官が、NGOが、授業研究に惹きつけられるのはなぜだろうか。私は、授業研究が五感や身体を用いたトレーニングである点とその理由だと考えている。ドナーが提供する主要な教員研修プログラムは、政策やすべきことなどの課題を「理解する」ことを教育関係者に求める。教師にとっては脳を使う研修である。研修は講堂や研修室で行われ、教師にとってのワークプレイス（学校）では行われない。教師の体にしみ込んだ日常業務の慣習を、解きほぐし、見極め、組み替える作業がドナーの研修には必ずしも組み込まれていない。そのため結局、教師にとって「理解すること」と「できること」の溝が埋まらない。

一方、授業研究で教師たちは、手を動かして授業をつくり、授業現場に足を踏み入れ、子ども一人ひとりの学びをみんなで見合い、聴き合い、自分の課題をつくりだす。ちょうど楽団や集団スポーツに参加するような感覚で、教師は授業に入っていく。教師は一人ひとりの力量に応じて参加できる。この身体を用いた専門性を高めるトレーニング——私はこれをアクショントレーニングと呼びたいと思う——が、教師にとって純粋に面白い。教師たちは取り組む中で、理解し、できるようになっていく。

バックザン省の行政官とNGOの取り組みは今や、中央レベルの研究者や教育政策決定者の目に留まっているようだ。今になって授業研究が再発見されたようである。IDCJとしては今後も、NGOや関係各機関と協力して授業研究の普及に貢献していきたいと考えている。

(文責：IDCJ研究員 津久井 純)